

発言要旨

## 抵抗のアジアは可能か—「魯迅精神」再審

菅孝行

I. はじめに（問題意識—専門的思想史研究や人文科学の地平を遠く離れて）

いま、一方で「グローバリゼーション」の抑圧にさらされながら、他方でその抑圧に加担させられもしつつ、そこを抜け出すための知的な模索を試みている人々は、——そういう人々にはこの場にいる私たちも含まれるのであろうが——かつて、ちょうど魯迅が帝国主義列強と古い中国のしがらみの中で、左右・新旧様々な勢力と論争し、あらゆる罵詈雑言を浴びせられながら、「掙扎」を重ねそのなかから覚醒のほうへ向かって歩んだのと、相似た営みを強いられているのではないか。いや、われわれは現代の「掙扎」に洗われるべきなのではないか。

竹内好は193—40年代の混迷する日本の現実に立ち向かうために「魯迅精神」を我がものにしようと試みた。それが近代日本の思想史を画す試みであったように、いまこの濃霧の立ち込める世界と向き合うための模索として、「魯迅精神」の再解釈と、再解釈された魯迅精神の実践することは、きわめて意義ある試みたりうるのではあるまいか。

### 報告要旨（Ⅱ—Ⅴ）

II. 再確認—竹内好の思想的業績

○魯迅を介した<抵抗するアジア>の発見

ドレイ（西欧による馴致・無自覚な馴致の受容+「伝統的」支配の内面化）の自覚、ドレイ性からの脱却

○西欧と対抗する<オルタナティブな近代>の主体（ナショナルリティー・ネーション）形成の契機の模索

○日本近代国家・国民とその心性（ドレイ根性）の批判—内面化された天皇制批判（一木一草にも天皇制がある）

○日本共産党（反体制勢力の思想と行動に内在する進歩主義・ドレイ根性・天皇制）批判（奴隷根性の反体制）

○近代の超克再考・日本のアジア主義評価の機軸の提示

III. 報告の主題—竹内好の仕事の今日における継承の可能性と条件の模索（どこに着目するか）

○竹内が魯迅に見出したもの（魯迅精神）に着目する

○「魯迅精神」とは？—抵抗（外部への、外部に浸潤された同胞への、対抗せんがために凝固した同胞への）

抵抗による自己矛盾=掙扎（困難きわまる覚醒=自己対象化—自己同定へのもがき）

掙扎を契機とする自己（近代中国のネーション）発見

※「古いものが古いままで新しい、というぎりぎりの存在条件を備えた人間」（「アジアにおける進歩と反動」）

敗北の自覚—アジアの覚醒

○敗戦後の竹内の変貌—永久非難者から啓蒙家へ

- 中国革命後の指標の移行—魯迅から毛沢東へ
- 文化大革命—日中国交回復後の竹内 指標としての「アジア」の拡散（ベトナム、パレスチナ、第三世界）
- それから30年、魯迅精神をどう再審し引き継ぐか
  - ・避けがたく自身の足を引っ張るものとしての「ナショナリティー」「ネーション」の壁の超え難さの再認識
  - ・世界の激震と台風の目のような無風（の日本）と一侵略・殺戮への構造的加担を自覚させない想像力のバリア
  - ・国民国家の紐帯としてのナショナリティーではなく
  - ・絵に描かれた普遍性の担い手としての世界市民やポストコロニアリティーではなく
  - ・アジアという地域性などではなく
  - ・一なる階級ではなく、多なるものの、互いに異なる想像力の集団的覚醒

#### IV. 竹内の構想とその推移の歴史的文脈（竹内の発見・竹内の変貌の軌跡）

##### 魯迅の発見

- 日本近代国家の様相—西欧近代に敏感に反応し、優等生的にこれを模倣し、「脱亜」して、アジアを侵略した
- この「ドレイ的」優等生国家日本の「国民」としての苦渋が対極としての魯迅を発見させた
- 竹内が構想した抵抗主体としてのアジア＝中国（抗日統一戦線の時代 近代国家を奪われた時期の中国）
  - 抵抗＝掙扎＝魯迅においてあるようなもの～ネーション形成のコア
  - 「大東亜戦争」が竹内の悶々たる心情を解放した（日本がアジアになった）
  - 中国侵略はゆがんだ連帯の形・大東亜戦争はアジア主義の無思想化の極限
- 侵略戦争（帝国主義戦争）の終結・中国革命の成功—指標の転換

##### 魯迅像の変転

- 1944年の魯迅像 反先覚者性 非「思想」性 非体系性 非作品性 非妥協性・論争性 保守性

##### 虚無への自覚

- 魯迅雑記に現れる魯迅像 孫文を毛沢東に媒介する関係
  - 平心の魯迅像 現代中国に思想革命を号召し、戦闘的現実主義を堅持した、もともと急進的、かつ、もともと頑強なる先駆的人物（極めて反魯迅的進歩主義的解釈）・・・「魯迅雑記」の竹内はこれを受け入れた
  - 瞿秋白 醒めた現実主義 強靱な戦闘 反自由主義 反虚偽の精神（瞿秋白は正確に認識している）
  - 毛沢東 政治的遠見 闘争精神 犠牲的精神（ご都合主義・政治主義的解釈）
- アジアの指標そのものの転換 死んだ非共産主義者の魯迅から生きている革命指導者毛沢東へ
- 竹内の変貌 永久非難者竹内（高橋和己）から、文明批評家・啓蒙家竹内へ
  - エトス・政治以前（松本三之助）—思想革命・精神革命・文化革命—から政治の革命へ
  - ネーション・ナショナリティー形成から、その上に樹立されるステートへ

- なぜ 40 年代後半—50 年代に、竹内は変貌したのか
  - ①毛沢東を最高指導者とする革命中国への期待・希望
  - ②魯迅の原像の分かりにくさ、希望との馴染みにくさ
  - ③平心や毛沢東の魯迅像の分かりやすさ 希望との馴染みやすさ
  - ④世界が「国家」の時代であったという歴史的背景（国家としての中国と重なり合うのは毛沢東であって魯迅ではなかった）
- 60 年代以降の更なる変転—竹内好の沈黙の理由—幻滅と儀礼 国家としての中国の変容と対応
  - ①政府主導化する日中国交回復プロセス
  - ②文化大革命の実像の露顕
  - ③中越紛争・中国民族問題の深刻化
- 竹内の抵抗のアジア像の敷衍と拡散＝脱中国 非欧米由来の世界の変革の可能性の発展と混迷に対応
  - キューバ革命 ベトナム革命 ラテン・アメリカ パレスティナーその希望と幻滅あるいは絶望

#### V. 現代世界と立ち向かうための「抵抗のアジア」像へ

- 再び魯迅へ（魯迅に遭遇したときの竹内に）立ち戻ること
- 現代の「掙扎」の地平は中国でなく、この政治支配の空間全体（われわれが、「掙扎」する）
- われわれはバラバラに寸断され、それぞれに絶望的なほどローカルで孤絶している。
- なによりもまず「掙扎」するもの相互の承認・共存を
- 一なる国家に向かうナショナルリティー・ネーション再形成ではなく国家に収斂しない多なる（エスニシティーの）覚醒を
- 国家の紐帯ではなく脱国家の紐帯を
- インターナショナルというよりトランスナショナルな（国家を介しない）紐帯
- ディアスポラにはディアスポラの「主体」を一祖国を望むものには祖国を

#### 時間があつたら

#### VI. おわりに

いまひとつ、現代の「掙扎」のイメージを十分に伝え切れなかったかもしれないことを、憂慮し、私のもう一つの関心事である演劇、演劇史の事例を挙げて、補足に変えたい。今日の日本の演劇は、何をどのように描くことが課題かを把握しえていない。新劇黎明期や 60 年代演劇の興隆期の見る影もない。たとえば戦争を描けば他人事の太平楽に陥る。コミュニケーションの不全を取り上げれば、現実には追い越され現実を模倣することに終わる。

岡田利規という作家兼演出家の集団が『三月の五日間』という舞台を作った。この舞台は、そういう閉塞を破る何ごとかを示唆していた。希望が語られていたのではない。示唆されていたのでもない。閉塞が自覚的に、優等生的近代をドレ

イとして生き抜いてしまった日本人社会が、その行き着くはてに見た、どうしようもない閉塞として、提示されていたというに過ぎない。

三月の五日間とは湾岸戦争が始まった時期の五日間のことである。岡田が描いたのは、日本人にとっての戦争に他ならなかったが、そこには銃声もミサイルも軍人も兵士も死体も出ては来なかった。ただひたすら登場人物たちは、反戦デモのノイズを時折耳にしながら、渋谷のラブホテルで五日間セックスをしまくるのである。そして、そういう行動と心情と事情説明を俳優たちは叙述するのだ。和解俳優たちに演出家が要求するのは、重心がずれてしまって傾いた姿勢で、口を利くと無意識的に手がついて動いてしまうのをコントロールできない、若者言葉の言葉つきも少し覚束ない、そこらへんころがっている日本人男女の、一見日常的な所作と語りである。ただそれだけである。

それは、渋谷のラブホテルに局在するローカルな事実の断片の再話である。そこから開示されるのは、自己認識を可能にする参照項を欠いた、いわば台風の目の中の平穩に充たされそれに浸るしかないニホンジン、「掙扎」の契機からさえ遮断された姿である。この欠如、あるいはこの平穩の充満への自覚だけが、知ること、認識することからの排除という意味での敗北の自覚への通路になっている。

このテキストと舞台は、極めて「反先覚者」的であり、非「思想」的で、「非体系」的で、作為された非作品性だが、劇的な起承転結と無縁で、「うまく」書こうとされていないだという意味で「非作品」的である。「虚無への自覚」には充ちている。変革だの革命だの主題にもならないという意味で「保守」的である。非妥協か論争的か、証拠はないが、たぶん、ニホンの浮薄な愛国者にも、反戦運動にも身を寄せないという意味では頑固の極みなのではあるまいか。

ここから漂ってくる態度、あるいは作品世界のテイストに、この飽食日本——毎年 35000 人が自殺し、失業者や自ら望まないニートやフリーターが巷に溢れ、ひきこもりが充満しても、それでも飽食の——が強いられている奴隷性への覚醒の契機という意味での「掙扎」の〈直前〉の姿を見出す。それはひたすらローカルであり、国境を超えた隣人たちの「掙扎」とは直接全く擦りあわない。何を媒介にして繋がれるかさえ、明らかではない。

しかし、何かが見出されようとしている。19 世紀末に——アジアを論じているのにヨーロッパ世界内部での発見を語るのはいか場違いだが、ここで主題としてきた「アジア」は地域の実態ではなく、オルタナティブな視座と態度の発見の媒介だから勘弁していただく——イブセンやチャーホフが、合理と普遍を信じて 20 世紀初頭の世界のテーマと様式をリアリズムとして形にし、それに日本の近代演劇も倣ったように、前世紀の中頃、人間とは愚挙によって同胞をしに追いやるだけの存在であることを発見したとき、演劇でも小説でも表現の様式が一変（演劇ではベケット）し、それと呼応するように日本でも 60 年代の新しい演劇が起こったように、もしかすると世界をつかみ、虚構を構築する新しいパラダイムを、人々の知的営為がやがて立ち現すことができるのかもしれない。そのための「掙扎」が、それぞれにローカルに始まっているのかもしれない。「三月の五日間」は日本におけるその一つの姿であるのかもしれない。